2021 年 6 月 13 日・佐土原キリスト教会･礼拝説教
聖書箇所：ヨハネ福音書 19 章 13～22 節
説 教 題：なぜ十字架に

十字架というと、どれくらいの高さを想像されるでしょうか。イエス様が随分高いところに架かっておられるイメージがあるのではないでしょうか。1963 年、エルサレム郊外で、ローマ時代に十字架刑で処刑された男性の骨や十字架刑の道具が発見されました。十字架が、思っていたよりも低かったのです。もし、イエス様の十字架がそのように低いものであったとすれば、イエス様は御自分をあざ笑う声や罵倒する声を浴びるようにして身に受け、それを忍ばれたのだろうなと思ったのです。

さて「1 コリント 1:22～24」にこうあります。「ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです」(1 コリント 1:22～24)。日本人もそうでしょう、宗教に求めるものは「しるし」―{どれだけお蔭(ご利益)があるか)}―ではないでしょうか。またギリシヤ人に限らず、日本人も宗教に「生きるための知恵―(世に処して行くための知恵)」を求める面があるのではないでしょうか。人々が宗教に求めるものが、しるしであり知恵であると分かっているのに、なぜ「しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです」と言うのでしょうか。そして、なぜイエス様は、自ら進んで十字架に架かられたのでしょうか。今日は「なぜ十字架に」というテーマで学びましょう。

1：人に罪の現実があるから…13～16 節

13 節に「ピラトは…イエスを外へ引き出し、敷石…と呼ばれる場所で、裁判の席に着いた」(13)とあります。「『敷石』と呼ばれる場所」というのは、総督官邸の外庭、あるいは玄関前の「石の舗装道路」のような場所で、ピラトはそこに臨時の裁判所を作ったのかも知れません。

さて、十字架とは何でしょか。私達は、大きな苦しみや困難のことを「これは私の十字架だ」という言い方をします。聖歌にも「主の賜いし十字架を、担い切れず沈む時、数えてみよ、主の恵み、呟きなどいかであらん」(聖歌 604 番)という歌詞があります。十字架を担って行く力は、恵みを数えることなのだと思いますが、しかし本来、十字架というのは、私達の罪の象徴なのです。

裁判の時、ユダヤ人達は「殺せ。殺せ。十字架につけろ」(15 新共同訳)と叫びました。イエス様は、人として生きて下さり、人々の悲しみに寄り添い、死んだ人の墓の前に立って「出て来なさい」と言ってよみがえらせて下さった方です。また、その教えによって人々を導き、魂をよみがえらせ、あるいは 5000 人の給食のような奇跡の業を行い、あるいは癒しを行い、神の恵みを人々に届けて下さった方です。素直に見れば、神がこの方を愛しておられる、特別な方であることが分かったはずです。その方を「殺せ」と叫んでいるのです。しかも 14 節に「その日は過越の備え日で、時は第六時ごろであった」(14)とあります。祭司達は「過越の祭り」の準備で忙しい時なのです。祭りで皆が食べる犠牲の子羊は、神殿で屠られ、各家庭に配られました。その羊を屠る大事な時間です。しかし、その大事な仕事も放って、イエスを殺すことに熱中しているのです。なぜでしょうか。5 章 18 節は、イエスが安息日に癒しをなさった後の記事です。「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである」(ヨハネ 5:18)。イエス様に対する妬み、怒り、憎しみ、また自分達の教え、立場を守ろうとする自我、それが彼らを支配しているのです。

彼らは極端でした。でも、彼らの姿は、私達には関係がないでしょうか。三浦綾子さんは言います。「人間は生涯の内に様々の罪を犯します。今までも犯して参りました…心の中に人をなじり、侮辱し、

驕り、高ぶり、情欲を抱き、人を羨み、妬み、はては人の死を願うことさえあるのではありませんか…自分の罪はこれだけだと、自分の中から取り出せるものではないのです。人間の存在そのものが罪なのです…人間は日々、赦して頂かなければ生きて行けないように、生まれついているものと言えないでしょうか」。私達にも、罪があるのではないでしょうか。人間は知恵や知識を求め、「お蔭」のようなものを求めます。しかしキリスト教は、何より人の中にある罪を問題にするのです。なぜなら、罪こそが人間にとっての一番の問題だからです。罪が私達に色々な重荷を負わせます。人間関係の問題を生みます。妬み、憎しみ、怒り、裁き、それらは、罪から出て、私達の人間関係を破壊し、私達自身を破壊するのです。それだけでなく、罪は、やがては私達を神の裁きの座に引き出します。そして私達を永遠の滅びに至らせるのです。人は、この罪の問題が解決されなければ、罪に縛られて生き、やがては滅びに至る、そういう存在なのです。「世の光」である方が証しをしておられました。「自分は罪人ではないと思っていた。でも職場での問題、家族問題、良く考えたら、そこに自分の罪があった…」。全ての人は罪人なのです。神の基準に達して生きてはいない―(生きられない)―のです。

しかし人は、この罪をどうすれば良いのでしょうか。罪は、自分ではどうすることも出来ません。どうにもならないものは、赦して頂くしかないのです。と言っても、誰に赦してもらうのでしょうか。もちろん、神様に、です。でも神様も「良いよ、良いよ、どうでも良いよ」とは言えない。神は正しい方です。正しい裁判官は、厳正な裁きをしなければならないのです。罪は裁かれなければならないのです。私達も、無慈悲な犯罪が起これば、正しく裁かれることを願うでしょう。しかし本当に神に裁かれたら、例外なく罪を抱えている私達は滅んでしまいます。だから十字架なのです。17 節に「自ら十字架を背負い」(17 新共同訳)とあります。聖書は「その罪をイエス様が変わって担って裁かれて下さった、それが十字架だ」と言うのです。

2：主イエスが罪人の友だから…17～18 節

イエス様は、2 人の強盗に挟まれるようにして十字架に架かられました。私は、イエス様が罪人の間に立たれたことに深い意味を感じます。イエス様は、裁判から十字架に至る一連の流れの中で、ある時点から何も言われなくなります。人々の罪を指摘することも、自分の無罪を主張することもせずに沈黙されます。なぜでしょうか。それは、イエス様にとってこの裁判は、ピラトによる裁判ではなくて、神様による裁判だったからです。「神が、罪ある人間のその罪を裁く裁判」でした。この時、イエス様が罪人の真ん中に、罪人と同じ所に立たれたように、イエス様が人間の側に立ち、私達の罪を全部背負われた時、神の裁判において、イエス様は無罪ではなかったのです。いや、恐ろしい有罪の罪がイエス様の背中にはあって、だからイエス様は何も言うことが出来なかったのです。だまって罪の罰に服すしかなかったのです。だからイエス様は、釘で打たれようが、骨が裂けようが、血が流れようが、激痛が走ろうが、私達の罪と、そこに下る罰を負い続けて下さっていたのです。その結果は、どうなったでしょうか。

「ルカ福音書」は「イエス様と 2 人の罪人の会話」を記しています。イエス様の様子をじっと見ていた 1 人の罪人は言います。「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出して下さい」(ルカ 23:42)。イエス様は、「今さら遅い」とは言われませんでした。彼に答えられます。「あなたは、今日、わたしと共にパラダイスにいます」(ルカ 23:43)。そういう道が開けたのです。罪人が救われる道が開けたのです。この人は、救いから一番遠いような人です。あるいは「こんな惨めな姿で人生が終わるのか」と絶望していた人です。その人がイエス様の愛と恵みにすがった時、その人に救いがやって来た、人生の逆転がやって来たのです。それが私達にもやって来るのです。神は私達に言われます。「イエスの十字架の故に、わたしはあなたをそのままで―(罪もある、弱さもある、醜さもある、色々な過去もある、そのあなたをそのままで)―受け入れよう。あなたが、ただイエスの

十字架を信じたから、わたしの子として受け入れる」。このメッセージが福音なのです。私達は自分の良さで神の前に立たなくても良いのです。イエスは、十字架において私達に「神への道」を開いて下ったのです。神が私達と直接的に関わって下さるようになったのです。

私達は救われます―(救われました)。しかし依然として罪人です。しかしイエスは、罪人の真ん中に立たれたのです。そして罪人を神の国に導かれたのです。イエス様は、今も、罪ある私達の真ん中に在って、罪ある私達と共に生きることを、「罪人の友」となることを喜んで下さる方なのです。十字架は、そのしるしです。だから私達は―(相変わらず、罪はある、問題もある、しかし)―イエス様を通して神が関わって下さるが故に、神が私達に働いて下さるが故に、どんな時でも諦めずに生きることが出来るのです。

3：主イエスが本当の王だから…19～22 節

ピラトは、「罪状書き」を書いて十字架の上に掲げました。そこには「ユダヤ人の王」と、ヘブル語、ラテン語、ギリシヤ語の 3 か国語で書いてありました。ヘブル語はユダヤの国語、ラテン語はローマ帝国の公用語、ギリシヤ語はローマ世界の共通語でした。つまり、全ての人が読める言葉で書かれたのです。ユダヤ人指導者達は、それは困ります。「ユダヤ人の王」として死なれれば、「ユダヤ人の王」を自分達の手で殺したことになります。彼らは、「彼はユダヤ人の王と自称した、と書いてください」(21)と言いました。しかしピラトは、「罪状書き」についてはユダヤ人の圧力に屈しないのです。「わたしが書いたものは、書いたままにしておけ」(22 新共同訳)と頑張るのです。ピラトの意地だったかも知れません。しかし私は、それ以上のものがあったと思うのです。イエス・キリストがユダヤ人、ローマ人、ギリシヤ人の、いや世界中の人々の本当の王だから、この「罪状書き」が掲げられることを、神が支えられたのだと思うのです。

「キリストが私達の王である」とは、どういうことでしょうか。私達に王がいたとして、王に期待するものは何でしょうか。色々あるでしょうが、その 1 つは、生きる希望を与えて欲しいということではないでしょうか。

1989 年、カナダのある町で交通事故がありました。荷物を積んだトラックが高速道路を降りた後、道を間違って町の方に走ってしまい、そこでブレーキが壊れ、病院にぶつかって炎上しました。事故の巻き添えをくって亡くなった女性の夫は、牧師に言いました。「なぜ、神は私の妻を取られたのですか。彼女は悪い女性ではなかったのです。私も子供達も、彼女を必要としているんです」。牧師は言いました。「私には、なぜ、こんなことが起こることを、神が許されたのか、分かりません。でも、神は、私達のために独り子を死に渡された方ではないですか。あなたと同じ痛み、悲しみを味わわれた方ではないですか。神を信じましょう」。彼らは、「妻の記念礼拝」を計画しました。夫は、「私達には友人や知人が少ないから」というので、50 人くらいのひっそりとした式を考えて準備しました。当日、式の始まる 30 分前には、500 人を越える人々がつめかけました。牧師は、イエス様の言葉「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ 14:1)を紹介してこう言いました。「私達は、困難に出会うと本能的に神を考えるかも知れない。でも私達が神との本当の生きた交わりをするためには、イエスが誰かということを知らなければならないのです。イエスは神の子だったのに、私達が神と交わりを持つことが出来るように死んで下さったのです。分からないことは多い、でも私達のために死んで下さったこの方に信頼するところに、必ず希望がやって来ることを信じましょう」。皆が「なぜ、こんなことが…」という怒りとも何とも言えないものを持っていました。しかし礼拝に参加した人々は、そこで神の臨在を感じたと言います。心が癒されて行くのを、さらには希望が与えられて行くのを感じたと言います。一番それを感じたのは、他ならぬ夫でした。彼は言いました。「私達の人生が、こんなに多くの人々に影響を与えるとは、信じられません。

私は今日、ここで起こったことを妻が知っていてくれることを願っています」。悲しみ、怒り、「なぜ…」という思い、皆の心の中で、それらがいつしか「神への希望」に変えられて行ったのです。後に夫は―(彼は幼児洗礼を受けていましたが)―「今、もう一度、イエス・キリストを主と告白して洗礼を受けたい」と言って洗礼を受けました。

この事件には、もう１つ、不思議なことがありました。トラックの運転手は、この事故で亡くなりました。彼もクリスチャンでした。不思議なことというのは、トラックが炎上している時、町の何人かの人々は、トラックのキャビンの中で運転手と一緒にもう１人の人が炎に包まれているのを見るのです。その人が神に救いを求めている声を聞いたのです。しかし、後に消防士が運転手の遺体を運び出す時、トラックのキャビンには、運転手の遺体が一体だけしかなかったのです。

妻を亡くした夫、彼には何の奇跡も起こった訳ではありません。しかし彼は、妻を事故で亡くした失意のどん底で、でも励まされて、神の愛を信じて行こうとしました。イエス様を主として行こうとしました。その時、神は、彼の中に、生きるために必要な希望を与えられたのです。彼も、町の多くの人々も、分からないことはある。しかし、神からやって来る希望の故に平安を与えられたのです。運転手は亡くなりました。彼は助かった訳ではありません。しかし神は、最後の最後まで彼を捨てられなかったし、彼を１人にはされなかったのです。そして、イエス様は、彼の魂を天の御国に運ばれたことでしょう。

「偉大な王」、「偉大な政治家」と呼ばれる人は沢山いるでしょう。でも、私達のために十字架の苦しみを、死を、引き受けてくれた王がいるでしょうか。生きるにも死ぬにも、私達と共に歩き、私達を魂の深いところで支えて下さる王がいるでしょうか。イエス様は、王の王である方なのに、私達のために死んで下さいました。イエス様の十字架は、私達の救いのため、永遠の命のためですが、それだけでなく、私達が死にさえ、神の臨在、慰めと希望を見出すことが出来るようにするためだったと、私達は教えられます。

4：終わりに

イエス様は、私達のために自ら十字架に架かって下さいました。十字架に架かって下さった王、それが私達の神です。感謝しましょう。